

二〇一四年度(平成二六年度)

中学校第一回

入学試験問題

国語

注 意

左のことをよく読んで、解答用紙に解答を書きなさい。

(ア) まず初めに、受験番号と氏名を解答用紙(一枚)に書きなさい。

(イ) 問題をよく読んで、解答用紙のきめられた場所に解答を書きなさい。

(問題用紙に解答しても無効です)

(ウ) 時間は五〇分です。

(エ) この問題用紙は持ち帰ることはできません。試験終了後、回収します。

※答えは、別紙の解答らんに書き入れなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かったから」と校長先生は典型的な言い回しを口に、「どうして大人はよくそう言いたがるのかな」と疑問に感じたが、とにかく、前日は打って変わり、快晴だった。

午前中の二時間、希望する生徒はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振りの練習をした。

担任教師たちのいく人かは腕に覚えがあるのか、生徒たちにまじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目な顔でチョークを使っているだけであるし、体育の授業でも笛を吹く程度であつたから、運動が得意な印象はなかったのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかったらしく、美しい姿勢で素振りを披露した。

「久留米先生、恰好いい」と女子生徒から声上がり、^①僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになった。

安斎も、僕と似たり寄つたりの、情けないスウィングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなでバットを振っているのは何だか変だよな」と言った。

「新しい組体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

打点王氏は真面目な人だったのだから、形式的にふらふらと歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、肘や膝を触り、丁寧にアドバイスをした。

僕たちのいるあたりには、一時間もしてからやつと来た。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗り込んだ二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振ってごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」

安斎は絶然^②のような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか?」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように、言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思つたのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで、安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。自分に向けられた槍^③の切つ先の形を、じつと確認するかのようではあつた。むっとしているかどうか分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力こもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよく隠せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。^④立ち向かうと吐^{はき}を決めたのが分かり、僕は気がではなかった。

打点王氏のほうはいえ、大らかなのか、鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁は顎を引くと、(1)と構えた。先ほどよりは強張りはなく、脚の開き方も良かった。

先入観を、僕は念じていた。そのバットで、吹き飛ばしてほしいと。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もが呆^{あは}けに取られ、草壁がいちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が

と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウェア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りはできなかったが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、顎を引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「体の真ん中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒められる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。

そして、だ。安斎がいよいよ、^⑤本来の目的に向かい、一歩踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁という生徒がいること自体、忘れていた気配すらあつた。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと、緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やっごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず、注意をした。

草壁はびくつと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても、不恰好で、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた生徒が、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田か誰かが、「オカマの草壁」と囁^{ささ}した。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言つたとは思わぬが、確かに、そういう発言により、他の生徒たちが、「草壁のことを下位に扱ってもよし」と決めている節はある。

起こると期待していたわけではなかった。むしろ、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目を瞠^みるほどではなかった。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。(2)とうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらも、風の音がした。

「君は、野球が好きなの?」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を見て、部屋の中だけど、時々」と(3)と言った。「ちゃんと、やったことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に一瞥^{ひとみ}をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ!」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの生徒たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」選手は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

^⑥自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。白く輝き、吐の中から光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指先にまで辿り着く、充足感があつた。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

その時、久留米がどういう顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞を発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々といなす。

「でも、草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。

() A ()。それとも、先生と安斎とのやり取りか

ら、() B ()、() C ()、

() D ()。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だから」

念押しする口調が可笑しかったから、いく人かが笑った。場が和んだといえ、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服できぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆっくりと、僕は、そうは、思いません」と言い切った。安斎の表情が(4)と歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

(伊坂幸太郎『逆ソクラテス』より)

問六 — 部⑥で、「自分の周囲の景色が急に明るくなった」のはなぜか、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 草壁がプロ顔負けのスウィングを披露し、僕と安斎も同じように上手くなることができると希望が持てたから。

イ 草壁の一振りが中学でも十分に野球部で通用するだけでなく、打点王氏が「いいぞ!」と威勢の良い声を出したから。

ウ 草壁の素振りがずいぶん良くなっただけでなく、僕と安斎が望んでいた言葉を打点王氏が草壁にかけたから。

エ 草壁のスウィングが打点王氏の指導で劇的に変化したために、まわりの生徒がその上達ぶりに驚いたから。

問七 — 部⑦で、草壁が「僕は、そうは、思いません」と言い切った」のはなぜか、その理由を五十文字以内で説明しなさい。

問八 本文中の(A)～(D)にあてはまる表現を次から選び、記号で答えなさい。

ア 嘘を突き通すべきだと判断したのか

イ いやもしくはすると、豪放磊落の大打者は、あまり深いことは考えていなかったのかもしれない

ウ あれは、乗りかかった船、の気持ちだったのだろうか

エ そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか

問九 本文中の(1)～(4)にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア ばそぼそ イ すっ ウ くしゃっ エ こくり

問一 — 部①で「なぜか面白くない気持ちになった」とありますが、なぜ僕と安斎はこのような気持ちになったのか、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 久留米先生が美しい素振りだけでなく、新しい組体操も披露して見せたから。

イ 久留米先生が自分たちと違い、美しくバットを振り、女子生徒の関心も引いたから。

ウ 久留米先生が自分たちに授業を教えるばかりでなく、見た目どおりに運動も得意で嫉妬したから。

エ 久留米先生が自分たちに素振りをするよう指示し、みんなが同じようにバットを振るのが機械的に見えたから。

問二 — 部②「本来の目的」とはどのような内容か、それが読み取れる表現を本文中より二十六字で抜き出しなさい(句読点は字数に含まない)。

問三 — 部③、どのようなことに対して「安斎が舌打ちを」したのか、「こと」に対して。」に続くように四十文字以内で説明しなさい。

問四 — 部④の「昨日の依頼」とはどのような「依頼」か、「こと。」に続く九字を本文中から抜き出しなさい。

問五 — 部⑤「立ち向かうと吐を決めた」安斎の様子を先生がどのように捉えているかが読み取れる比喩表現を本文中より五字で抜き出しなさい。

問十 — 部の「と」と同じ用法のものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 君と歩いた。

イ しつかりと聞いた。

ウ 彼がとうとう話した。

エ 昨日のことだと知った。

問十一 — 部a～dの漢字をひらがなに直しなさい。

a 典型 b 強張り c お世辞 d 和んだ

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現代では、数学や社会や法律は教え込まれても、コンピュータやワープロや先端技術の扱い方は学んでも、もつとも重要でもつともいまま必要な教育がなされていないと思います。それは、人生というものの無限の価値、生命の尊厳、あるいは宇宙や大自然の中における人間の重大さです。

もつとも、^①こういう教育は戦前も、むしろ戦時中もなされていません。(1)

技術偏重、テクノロジージュウセンの社会がつづく以上、それと対面的な「人間らしい生活の見なおし」教育がなされていいわけです。しかも、これはつねに社会の中では声を大にして求められていたわりには効果がない。それは、幼児期からそのような教育がなされていないことが原因です。幼児期、少年期のもつとも鋭敏に情報^②がキユウシユウされるべき時期に、それらがほとんど無視されて技術教育、人づくり教育に占められてしまうことを、はなはだ残念に思っています。

人命はかけがえがなく、人生はたった一度しかなく、死によってすべてが失われること、それと人間と同じ生命が自然界にみち、それらが密接に相互関係を保ちながら地球が存在するということが、地球はわれわれが住める^③の天体であること、という問題まで、積極的に教え込んでいく教育が、いまこそ必要なのではないかということです。

幼い頃から生命をおたがい大事にするとか、生きものをいたわろうという教育が徹底すれば、現在の子供をめぐる悲惨な状況はなくなると思います。これはいまからはじめてもけつして遅きに失せず、すぐ生かされる方法です。(2)、^④という環境におかれても事態を乗り越えてタフに生きのびる根性を培うことになりま

す。ばくは厚生大臣の勉強会である「生命と倫理に関する懇談会」の委員をしていまして、そこで教科書問題を取り上げたことがあります。そのときにばくは、なぜ小学校の一年生から命というものの全体を教える教科書がないのかと言った

落伍するどころか家庭や身内にまで累を及ぼす。だからつとめて他人の尻馬に乗るか石橋を叩く主義で世の中を渡る、それが教訓だというようにしつけられます。危険だから刃物は持つな、危険な遊びをするな、知らぬ場所へ行くな、けんかはするな、何か起こると親が出ていって処理してしま

す。(3) 子供はいくじなく傍観するか、大人まかせです。

昔はかならず町に空地とか林があつて、そこはガキ大将に率いられた子供たちの遊び場、というより「国」のような場所でした。いじめられっ子のばくでさえも、兵隊ごっこやインディアンごっこには加わりました。(4) だれもが膝小僧にすり傷をいっばいつくって血だらけになって帰って来ても、親も先生もなんにも言わなかったものです。

いまでも空地や広場は、探せばどこにだってあります。子供たちはそんなところを、宇宙基地とかアマゾン^⑤の奥地とか幻想の国に見たてて騒ぎたいのです。そうなれば、空想はどんどんふくらんでいきます。自分が夢の中のヒーローやヒロインになり、正義の味方や、スーパーマンにもなれる。かつて二階からアトム^⑥のマネをして飛び降りてけがをした少年だって、心の中ではきつと夢にひたっていたのでしょ

う。そういう夢や空想が、幼い日の強い記憶として残れば、どんなに心が広く明るい社会人になるかは想像できま

しょう。ある企業が企画したことに「一人旅委員会」というのがあつて、三浦雄一郎氏などといっしょにばくも加わつて、子供を、トム・ソーヤーやハックルベリー・フィン^⑦のようにひとりで冒険をさせようと提言しました。

ばくは、たんに家の周辺の知らない道を歩くことだつて冒険だし、そこで出会うものは、すべて未知のものだ、なにも鉄道や車で遠方に出かけなくても、身近なところからひとり歩きやひとり旅を始めさせよう、と言いました。もちろん、旅行は未知の世界を見せてはくれますが、今日のようにバックの安全旅行では、何のためにその土地へ行くのか無意味です。いったい何があるのかどこへ行くのかわからない場所へ、自分の意志で行かせることが、子供の強い意志と冒険心をはぐくむことになり、夢を抱かせるのです。

ことがあります。

一年生の国語の教科書の最初のページを広げたときに、われわれの時代は「咲いた。咲いた。さくらが咲いた」とか、「はな。はと。豆」でした。ばくなら、その教科書の最初のページに、ちょうちよが飛んでいる絵を描いて、

「ちょうちよが飛んでいます。楽しそうですね」

つぎの見開きに、こんどはクモの巣に引っかかったちょうちよを描いて、

「ちょうちよが死んでいます。かわいそうですね」

こういうところからはじめたいと思います。それは、子供たちがじつさいに見ているものです。死んでいる虫も、生きている虫も見ているのです。そこで、なぜ死んだのだろう、クモの巣に引っかかったからだ。クモが食べてしまった。なんでクモが食べるのかというところからいろいろな疑問がわいてくる、いろいろな質問が出てくると思うのです。そこらへんからジワジワ命の大事さ、あるいは命の神秘さみたいなものを教えていくというような教科書があつたらいいのではないかなという気がするのです。

残念ながらそういう教科書はありません。しかし、みなさんが小さいお子さんをお持ちだったり、お孫さんがおありだったなら、もしも近くに病気の人がいたり、亡くなった人がいたり、または動物とか、植物とかの話を、生きるということに引っかけちゃつとお話しいたきますと、その子供たちの将来にとってどんなにプラスになるかと思っています。

^⑧いまの子供をめぐる状況のなかで、大きく欠けているものがあります。それは冒険です。

冒険小説というのがわれわれの世代にはありました。いまでは、冒険映画とか、冒険マンガなどが若者の心をいやしています。冒険というのは何でしょう。それは言うまでもなく^⑨のもののへの挑戦です。

現在の教育やしつけのなかで、この冒険心の育成がもつとも欠けています。合理主義のなかで、子供時代から安全を第一義とした文化が与えられ、危険は大人の手で刈りとられています。だれだって失敗は許されない。そんなことをすれば

遊ぶ、そしてそれから学ぶということは子供にとっては重要です。さらにできれば、失敗や危険の伴う要素も容認してやりたい。失敗や危険の伴わない人生なんてありません。それを大人が過度に子供から遠ざけようとするのは越権だし、逆効果です。誤解のないように言いますが、夜、サカリ場^⑩で遊ばせるとか、そんな放任主義を言っているわけではありません。車などを買い与えて好きなところへ行つて遊んでこいなんて言う親は、もつとも愚劣です。

原始時代、われわれの先祖は、なにひとつ持たない生活からひとつひとつ文明を創造してきました。人類の英知と言われるゆえんです。必要に迫られてと言いますが、それが技術開発につながった時点で、いつのまにか物質文明偏重になつてしま

いました。これからの子供たちには、裸一貫の人間本来の姿にもどつて、人間らしい生活を送つてもらいたいと思います。それには何度も申し上げたことですが、正しい生きがいとか生命観を確立してもらいたい。それをばくくん^⑪でやる親や教師は、大人のファシズムをふりかざしてはいけません。自分たちの生きてきた道を子供に正直に見せてやること、あとは子供たちの判断にまかせることです。これは一〇〇〇年前から未来まで、変わることのない原則だと思ふのです。

(手塚治虫『ばくのマンガ人生』より)

問一 ― 部①「こういう教育」とありますが、どのような教育のことですか、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 数学や社会や法律、コンピューターやワープロや先端技術の扱い方を合理的に学ぶことができる教育
- イ 人生というものの無限の価値、生命の尊厳、あるいは宇宙や大自然の中における人間なの다는ことを知る教育
- ウ 幼い頃から生命をおたがい大事にすると、生きものの死から弱肉強食の関係を理解させられる教育
- エ 人生はたった一度しかなく、死によってすべてが失われることを知り、それに対応できる技術教育や人づくり教育

問二 文中の ② に入る四字熟語について、解答用紙のそれぞれの空らんに漢数字を入れて四字熟語を完成させなさい。

問三 ― 部③「そこらへんからジワジワ命の大事さ、あるいは命の神秘さみたいなものを教えていく」とありますが、著者は命の大事さをどういう方法で教えればよいと考えていますか、本文中の言葉を使って五十文字以内で説明しなさい。

問四 ― 部④「いまの子供をめぐる状況のなかで、大きく欠けているものがあります。それは冒険です」とありますが、冒険が欠けてしまった理由が書いてある部分を解答用紙の語句に続く形で本文中から三十一文字で抜き出し、その最初と最後の五字を解答用紙に書きなさい（読点を含む）。

問五 ⑤ に入る二文字の語句を本文中から探しだし、抜き出しなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | 1 | しかし | 2 | また | 3 | だから | 4 | そして |
| イ | 1 | また | 2 | そして | 3 | しかし | 4 | だから |
| ウ | 1 | そして | 2 | だから | 3 | また | 4 | しかし |
| エ | 1 | だから | 2 | しかし | 3 | そして | 4 | また |

問十一 ― 部 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

- a ユウセン b キュウシユウ c マネ d サカリ

問六 ― 部⑥「他人の尻馬に乗るか石橋を叩く主義」になつてしまうのはなぜですか、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 子供に危険を犯させない何もかも安全なパッケージが用意されてしまうから。
 - イ どんな環境におかれても事態を乗り越えてタフに生きのびる根性を培えるから。
 - ウ 夢や空想が、幼い日の強い記憶として残れば、明るい社会人になれるから。
 - エ 失敗をすれば落伍するどころか家庭や身内にまで累を及ぼしてしまうから。
- 問七 ― 部⑦「バックの安全旅行では、何のためにその土地へ行くのか無意味です」とありますが、なぜ無意味なのか、説明しなさい。

問八 ― 部⑧「人間らしい生活」とはどのような生活ですか、次の選択肢のなかから正しいものには○、誤っていれば×で答えなさい。

- ア 生きがいとか生命観を確立できる生活
- イ 原始時代のような何もたない生活
- ウ 自分でひとつひとつ創造していく生活
- エ 技術開発の必要を迫られるような生活

問九 ……部の「ある」と同じ用法のものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア そこに一冊の本がある。
- イ 捨ててある本を拾った。
- ウ ある朝、胃が痛かった。
- エ あるはずのものがない。

問十 空らん（1）（4）にあてはまる接続詞として最も適切な組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

問一

[illegible][illegible]

問四

りと。

問五

問六

[illegible]

問八
A
B
C
D

問九
1
2
3
4

問十

問十一			
c		a	
世	お	典	
辞		型	
d		b	
和		強	
	んだ	張	り

点

点

点

点

点

点

点

点

点

点

点

問一

問二

唯

無

[illegible]

問四	
最後	最初

問五

問六

問七

問八
ア
イ
ウ
エ

問九

問十

問十一			
c		a	
マ		ユ	
ネ		ウ	
		セ	
		ン	
d		b	
サ		キ	
カ		ユ	
		ウ	
		シ	
		ユ	
	り	ウ	

5

点

点

点

点

点



点

点

点

受験番号
氏 名

合計点数
